

牛乳パック はがきに再生



水につけ込み 1リットル分から4枚

牛乳パックを回収してリサイクルすると、1リットル入り6本でトイレットペーパー約1個分になるという。丈夫なパックにするため、質のいいパルプが使われている。このパルプで、世界でただ一つの「お手製はがき」もつくれることができる。

9月中旬、千葉県野田市の市立三川小学校では、4年生の75人がはがきづくりに取り組んだ。リサイクルをテーマにした総合的な学習の時間に、「全国牛乳パックの再利用を考える連絡会」(全国パック連)のメンバーらが出前授業をした。

何度か水を切るとどんどん薄くなっていく。アイロンをかけ、水分を飛ばしてできあがりだ。はがきには、児童がそれぞれ選んだハートや花などの柄がすき込まれている。「できたて重た」「すごい」。手にした児童らは口々にしゃべっていた。全国パック連によると、出前授業は2007年から続けている。

パックがどう回収され、どうリサイクルされるのかを説明し、紙すき体験をしてみよう。平井成子代表は「リサイクルの意義を伝えることが目的。牛乳パックにはとてもいいパルプが使われていて、捨てるのはもったいないということを紙すきで体験してもらおう」と話す。牛乳はもともと瓶で売られ、

回収、洗浄して再び使われていた。全国牛乳容器環境協議会(容環協)によると、紙パックが国内で登場したのは1960年代。軽く、輸送費を抑えられなどの利点があったという。当初はリサイクルされていなかった。紙の両面にポリエチレンのフィルムが貼られているため、パルプだけ集めるのが難しかったからだ。「捨てるのはもったいない」と、平井さんの母らが84年に回収を始めたのがリサイクルの始まりという。

eco活の鍵

パルプづくりのポイントの水へのつけ込みという。さいた紙パックをよく水に浸すことでフィルムが取り外しやすくなる。ミキサーでパルプ液をつくる際もタマになりにく

い。浸す容器は洗面器などを流用できる。紙すきで使う網や木枠の元になる木は、ホームセンターなどで手に入る。日本郵便によると、52円で送れるはがきの大きさは縦が14×15・4センチ、横が9×10・7センチ。重さは2×6センチという。超えるとさらに料金がかかる。

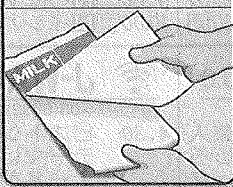
容環協によると、2012年度の使用済み紙パックの回収率は33・8%。ここ数年は微増を続けているという。1リットルの牛乳パック1個をリサイクルすると、焼却処分には比べ23・4倍分の二酸化炭素の放出を減らせる。「市町村で回収方法が異なるので、リサイクルの際には確認して頂きたい」としている。自宅でも紙すきはできる。

牛乳パックからはがきを作る方法

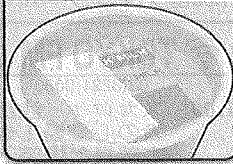
全国パック連の資料から

パルプづくり

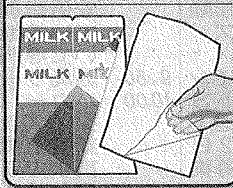
① 2枚にさいて、パルプ面を出す



② 粉せっけんを溶かし、さいたパックを2~3日つけ込む



③ せっけんを洗い流し、フィルムをはがす

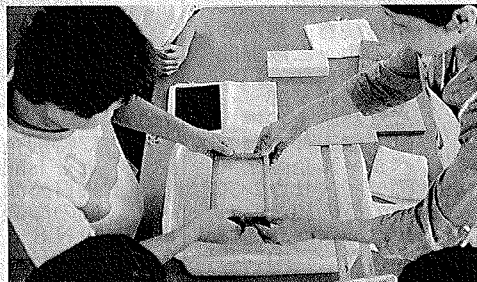


④ 細かくちぎってミキサーにかける



はがきづくり

- ① はがき大の木枠2個、網2枚、渡し棒2本を用意
- ② 木枠の間に網をはさみ、パルプをすくう
- ③ 上の木枠を外し、網ではさんで水を切る
- ④ タオルや手ぬぐいなどではさんで、さらに水気をとる。アイロンをかけて完成



図。切り開いた牛乳パックを2枚にはいで、粉せっけんを溶かしたぬるま湯につけ込む。フィルムをはがして細かくちぎり、水とともにミキサーに入れ、1~2分でパルプ液ができる。容器にパルプ液を入れ、細かな網をはさんだのはがき大の木枠ですくう。千代紙や押し葉を入れるとそのまま柄になる。1リットルパック1本から4枚程度のはがきができるという。

(木村俊介)